

一月二六日

現代とは何か、東大出版会の原稿書き始める。正確に言えば書き始めようとしている。頭がコラム型になってしまっているので少見出しをつなぐ思考形式から変わるのに苦労する。同時多発テロに出来るだけ触れずに書くことだけは決めた。檜垣平山に古材再生のチョツとしたデザインの指示。伊豆のハンマーから家のデザインできたかのさいそくあり。今日はこれから難波さん野村とコンバージョンの打ち合わせ。

一月二七日

昨夜は嵐だった。雨降りだと少なくとも霜柱は降りない。そうするとようやく芽ぶいた百合や水仙の芽がやられる事はない。家の屋上の事なんだが、そんな風にしか頭が廻転しなくなってきた。我ながら気味悪い。しかし家の屋上の霜柱の余りにも壮絶な事。五〇mmになんなんとする、時に70mmを超える氷柱が屋根一面に林立するのである。南の畑の霜柱なんか地味なもんで見るに耐えぬが家のは凄い。余程家の屋根は冷えるんだろうな。冷やすときは冷やすというのが今時の先端的な自然農法の流れらしいから、さぞかし上手い野菜がとれるだろう。

夕方西域関係の本を探しに出かけるが収穫なし。

一月二八日

朝十時鶴間市役所分所で森の学校打ち合わせ。午後三時世田谷に戻る。夜八時迄打ち合わせ。こんな日は一日実務的打ち合わせで暮れて疲れて、何だか充実した一日のような気になってしまっただが、それは怪しい。

一月二九日

フィンランドへ行く前に東大の原稿だけは上げなければならぬ。他にも幾つもたまっている、次第に深刻になってきた。書き物がたまってくると体の節々が痛くなるので、アアだいぶたまってるんだなとわかる。編集者の怒りが宙を飛んでくるのだろうか。今日は卒計の採点。毎年の事だが期待せずに見たい。凄い奴が出てくるのも望まないが、キチンと時代をとらえたモノが出てきて欲しいと思う。近代建築史のまとまった講義がない事は設計製図の成果にも現われているのではないか。歴史感覚は設計には必須なのだが、それを教える事が早稲田は困難な状態にある。

イヤー仰天した。早稲田の卒計の大半のテーマが保存と再生になってしまった。ここ迄急転回するとは予想もしなかった。呆然である。